

狂った世界へ  
の神の救済策



# 狂った世界への神 の救済策

今日、世界が狂っているという点を改めて強調する必要はない。この利己的な世界の狂気は、国家レベルから国際レベルに至るまで、生活のあらゆる活動に本質的に現れている。このため、世界は苦しみに満ちている。地球の広大な地域では、何百万もの人々が餓死し、大陸から大陸へと、人類の心はさらに悪い事態への恐怖で満たされている。最も有能な政治家や指導者たちが状況を好転させようと最善を尽くしているにもかかわらず、現在起きていることの壊滅的な影響から逃れる道はなさそうだ。

これはイエスが予言した時代である。「諸国民は、荒れ狂う海と異常な潮汐に惑わされ、動揺する。人々は地上に降りかかるものを見て恐怖に陥る」（ルカ21:25,26）。世界がそう見るように、恐怖には十分な根拠がある。イエスは、この恐怖と共に困惑が伴うと述

べました。ここで「困惑する」（  
）と訳されたギリシャ語は、文字通り「逃げ場がない」を意味します。これが世界が恐怖に満ちている理由です。彼らはこのジレンマからの脱出路を見出せず、イエスが「世界の初めから今まで、また今後二度と起こらないほどの大きな苦難」と表現したこの時代の、人間の狂氣的な行動からの脱出路を見出せないのです。（マタイ24:21）この言葉でイエスはダニエル書12章1節の預言をほぼそのまま引用している。ダニエルは同じ時代を「国が生まれて以来、かつてなかったような苦難の時」と表現している。

この苦難の時がいかに深刻かを強調するため、イエスはこう付け加えた。「もしあの日々が短縮されなかったなら、生き残る者は一人もいないだろう。しかし神の民のために、あの日々は短縮されるのだ」（マタイ24:22）。しかしイエスは、これらの日々が「選ばれた者たち」である教会を通して働く神の力によって短縮されると保証している。言い換えれば、イエスは人間の狂気というこのジレンマから脱出する方法はないという人間の視点

に同意しつつも、神が人類のために脱出の道、すなわち罪と利己主義という自らの悪しき道から救い出す救いの道を用意してくださったという考えをもって私たちを慰めてくださるのです。私たちがこのタイトルで「狂った世界に対する神の救済策」と呼んでいるのは、まさに神が用意してくださったこの脱出の道なのです。

## 王国

一言で言えば、墮落した人類の病に対する神の救済策とは、神の御言葉全体を通して確立が約束されてきた王国、すなわち統治である。その約束の一つは、王国における偉大なメシアであり王の到来に関するものである：「私たちに子どもが生まれ、私たちに与えられた。その肩に統治が置かれ、その名は『驚くべき助言者、全能の神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その統治と平和は増し加わり、終わりが無い。ダビデの王座と王国の上に、これを治め、裁きと正義をもって確立する。今からとて、永遠に。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」イザヤ書9章6-7節

主は数多くの預言を記し、御国がこの地に確立されることを確信させてくださっています。そして聖書（

）の多くの箇所、この御国は「主の山」と呼ばれる山として言及されています。ダニエル書第2章では、ダニエルの預言に従い、この山はまず石として現れ、この世の不敬虔な王国や政府を打ち砕き、やがて全地を満たす大いなる山となります。この章の45節は神の王国に関する驚くべき確証を与えてくれる。

「あなたが、人の手によらずして切り出された石が鉄、青銅、粘土、銀、金を砕くのを見たのは、大いなる神が将来起こることを王に知らせられたからである。この夢は真実であり、その解釈は確かである」と記されている。イザヤ書25章でも、神の王国は山に例えられています。「この山で」と記されています、「万軍の主は、世界のすべての民のために素晴らしい宴を設けられる。それは、澄んだ熟成したぶどう酒と、選りすぐりの肉による、美味しいごちそうとなるであろう。」イザヤ書25:6

## 王国の祝福

ミカ書4章1-

4節には、王国の祝福が詳細に記されている。1節にはこうある。「  
」主が御自身の来るべき王国を山に喩えられるのはふさわしい。これらの預言はまず第一にイスラエルの民に向けられたものであり、イスラエルの民は山から統治されることに慣れてきた。エルサレムのシオンの山は、イスラエルを治める政府の国家本部であった。ダビデはこの山において、神の選ばれた民であるイスラエルの諸事に対して統治権を行使したのである。したがって、この預言や他の預言において神が「山々の頂に御山を確立する」と語られた時、献身的なイスラエル人は容易に理解できた。彼らの神、エホバが、かつてないほど強力な王国を地上に築くと約束されているのだと。そしてそれはまさにその通りとなるのである。

ミカによる王国の確立に関する預言において、追加の説明と興味深い点が提示されている。ここには、この主の山が「主の家山」

であると記されている。これもまた、イスラエル人にとって馴染み深いな表現であった。イスラエルにおける主の統治の家系はダビデとその後継者たちによって率いられていた。しかしダビデとその血筋の後継者たちは、将来地上に到来する神の王国の統治の家系ではない。過去の多くの事例において、国家や帝国を統治する家系は、王の死後に統治権が同一族の別の成員へ継承される家族的な仕組みで構成されていた。

主の預言的な家も同様に機能する。この家は主の子らで構成され、イエスが彼らの頂点に立つ。イエスが初臨で来られた時、「ご自分の民のもとにやって来られたが、民はイエスを受け入れなかった。しかし、イエスを受け入れた者たちには、神の子となる権能を授けられた」と記されている。（ヨハネ1:11,12）。イエスのもとで、これらが神の統治する家の最初の成員となった。しかしイスラエル全体において、この栄誉を授かるほどにイエスを受け入れた者は十分ではなかった。そこで神は定められた時に、福音の宣教を通して異邦人へと目を向け、あらかじめ定められて

いた数を満たすにふさわしい者たちを見いだして、御自身の統治する家を完成させようとなさったのである。新約聖書には、イエスの初臨以降に信者となり、聖霊の力によって神の子、すなわち神の子どもとなった者たちについて多くが記されている。彼らへの約束は、もし忠実であり続けるならば、神の統治の家であってキリストと共に支配するということである。（ローマ8:16-19）「御霊が私たちの霊とともに、私たちが神の子供であることを証ししてください。子供であるなら、相続人でもあります。神の相続人であり、キリストと共同の相続人なのです。しかし、もし私たちがキリストの栄光にあずかるなら、その苦しみにもあずからねばなりません。私は、今の苦しみは、将来私たちに現される栄光に比べれば、取るに足らないものと考えています。なぜなら、被造物全体が、神の子たちの現れを待ち望んでいるからです。」



## 主の道

ミカ書4章1節における神の王国に関する預言は、「民がそこへ流れ来る」と宣言している。イザヤ書2章2-4節の類似の預言も「すべての国々がそこへ流れ来る」と宣言している。これらの預言の両方において、神の王国へ流れ来るあらゆる民族の多くが言うことが保証されている。「さあ、主の山に登ろう。ヤコブの神の家に。主は御自身の道を教え、私たちはその道を行く。律法はシオンから、主の言葉はエルサレムから出るからだ。」（3節）

この預言において、シオンの山は神の王国における神聖な権威を表している。したがって、これはイエスとその忠実で栄光に輝く追随者たちによって構成される、その王国の霊的な側面を表すことになる。主の言葉はエルサレムから発せられると告げられている。ここには神の王国の機能のより広範な側面が言及されている。すなわち、地上の人類と理解可能な接触を持つ側面である。この接触は、

古代の神の僕たち、例えば昔の忠実な預言者たちや、イエスの初臨以前に忠実に神に仕えた者たちを通して行われる。イエスは「東から西から多くの人々が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に食卓に着く」と語った。(マタイ8:11)。ここで「着く」と訳されているギリシャ語の表現は、弟子たちが師匠や教師の前に座る様子を指している。したがって、古代の神の忠実な僕たちは、神の王国において人類に神の言葉、すなわち律法を伝える者となる。これらはミカ預言における象徴的なエルサレムと考えることができる。ここに、王国の霊的側面と地上的側面の両方が示されている。地上的側面の人々は霊的側面の人々を代表し、イエスとその教会から受けた神の律法を人々に伝えるのである。

この神の王国に関する預言に登場する民や国々は、主の道を知り従いたいという願望を示している。その時には「主は多くの民を裁き、遠く離れた強国を戒め[ヘブライ語：矯正]される。彼らは剣を鋤に、槍を鎌に変える。国は国に対して剣を挙げず、もはや戦いを学ぶこともない。」ミカ書4:3

ここで注目すべきは、主の道と利己的な人間の道との大きな違いである。何世紀にもわたり、誤った人間の哲学は、平和を保証する唯一の方法は戦争に備えることだと主張してきた（

）。しかしここでは、主の道が異なることが示されている。人々が主の道を学ぶとき、彼らは戦争の計画や準備を放棄する。代わりに「剣を鋤に、槍を鎌に打ち直す」。防衛のためと称して大軍を築き続け、それによって平和を保証しようとするのではなく、「国は国に対して剣を挙げず、もはや戦いを学ぶこともない」のである。

これが、今日の世界に蔓延する狂気を解決する上でどれほど大きな前進となるか考えてみてください！もはや母親は、息子が戦場に送り込まれて虐殺されるかもしれないと恐れることはなくなるでしょう。世界の資源が巨大な軍事体制を維持するために枯渇することもなくなる。彼らはもはや戦争を学ばず、戦争を行わなくなるからだ。これが主の道であり、神の王国が地の果てまで確立される時に、すなわち山々の頂に君臨し、すべての民の

事柄を支配する時に、地全体に確立される道である。我々は、狂った世界に対する神の救済策のこの側面を喜び祝う！

ミカ書4節にはこう記されている。「すべての人は、自分のぶどうの木といちじくの下に座り、だれも彼らを恐れることはない。全能の主が語られたからだ。」ぶどうの木といちじくの木は、全人類の経済的安定を強調している。現代世界にこれほど多くの恐怖が存在する原因の一つは、経済的安定の欠如である。多くの人々の心は、生計の手段を失い、生活保護状態に陥るのではないかという恐怖で満たされている。しかし、家から追い出される脅威によって、あるいは自分や家族の飢えへの恐怖によって、誰も彼らを恐れることはない。いかなる目的であれ、誰も彼らを恐れることはない。そして「万軍の主が語られた」という最も祝福された確信が私たちにある。狂った世界に対する神の救済策の実現可能性と成功について、これ以上の確信がどこにあるか。

今日の世界では、政府高官でさえ「人々にこう行動させれば」「政府がこうした法律を制定すれば」平和と安全が訪れると言う者を時折耳にする。しかし神の救済策には、（  
 ）といった不確実性の余地は一切ない。神の救済策は、神の力によって——  
 主の家の山のように——  
 すべての民と国々に強制的に施される。彼らは従う以外に選択肢を持たない。主の道が実にどれほど素晴らしいかを悟った時、彼らは喜びに満ちるだろう。幾世紀にもわたる待ち望み、そして一部の人々の祈りの後、ついに神の道がこの地に確立されるのだ！

## さらなる必要性

ミカ書（4:1-4）に詳述される神の国の祝福が、罪に病み死にかけている世界にとってどれほど素晴らしいものであろうとも、それは依然として人類のあらゆる病の治療法には至らない。ミカ書の預言は、人々がもはや戦争を学ばなくなるため、戦争がなくなることを示している。剣を鋤に、槍を鎌に打ち直すことが約束され

ている。戦争と軍備維持に費やされている資源が、諸国民間の平和と善意の促進に用いられるのだ。経済的安定が保証され、住む家を奪われる恐れも飢える心配もない。は人間のあらゆる必要において繁栄と豊かさに祝福される。

しかし人類がこれらすべての祝福を享受する中でも、彼らは依然として悲しみと苦しみの恐るべき災いのもとで生きることになる。なぜならそれは依然として滅びゆく種族だからだ。世界にはあらゆる国々に病院が密集し、それらの病院は苦しむ者と死にゆく者で満たされるだろう。精神病院は溢れんばかりに満員となる。いずれの家も遅かれ早かれ恐るべき病に襲われ、最終的には確実な死を迎える。これは理想の世界ではない。イエスは弟子たちにこう祈るよう教えた。「御国が来ますように。御心が天で行われるように、地でも行われますように」（マタイ6:10）。天に肉的な争いがあるとは想像できないし、飢えがあるとも、病や死があるとも想像できない。だから神の王国は人類の病の完全な治療となるのだ。

聖書はこの事実を保証している。神の王国が再び山に喩えられた既に引用した預言において、病と

死も同様に滅ぼされると確約されている。これがイザヤ書25章6-

9節の預言である。主が人々の願いを満たすために備えられる多くの祝福について言及し、この山において万軍の主が「世界のすべての民のために素晴らしい宴を設けられる」と告げられています。それは「澄んだ熟成したワインと上等の肉による、美味なる饗宴」となるのです。

「主は、地の上に垂れ込める死の影、暗雲を取り除かれる。全能の主は、すべての涙をぬぐい去られる。」これは、人類の大半が時代を超えて経験してきた知識の欠如、すなわち神とその御業に関する知識の欠如を指しているように思われる。この点における無知という巨大な雲、あるいはベールは、すべての人々、そして諸国にもかけられてきた。諸国がこの覆いを被っているがゆえに、彼らは戦争の準備をしながら平和を築けると思い込んでいる。彼らは今、この覆いの向こう側を見

通して主の御業を理解し、感謝することができない。しかしその覆いは取り除かれる。他の預言が示すように、その時「主の知識は海を覆う水のように、地を満たす」からである。（イザヤ11:9、ハバクク2:14）

この神の山、すなわち神の王国において、「主は死を打ち破って滅ぼされる」（イザヤ25:8）。別の訳ではさらに強く、「主は勝利のうちに死を打ち倒される」と記されている。そう、この大いなる敵である死は、神の王国の力によって打ち倒され、もはや全人類の幸福を損なうことは許されない。預言は続く。「主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい去り、その民の恥を全地から取り除かれる。主が語られたからだ。」すべての顔から涙がぬぐわれる神の御国のもとでは、なんと変わった世界となることか！

ここで涙は悲しみ、嘆き、苦痛の象徴として用いられている。しかしこれらすべては取り除かれ、あらゆる都市、町、村、田舎に喜びが溢れ出すであろう。



預言はさらに、主の民に対する責めが全地から取り除かれると述べる。この神の民への責めは、罪と死の支配の特徴の一つであった。サタンは神に仕える者たちに対してその手下を煽り立て、彼らは責められ、迫害され、誤解され、神の道、すなわち義と平和と善意の道のために断固たる立場を取るほどに真に備えられ勇氣ある者はほとんどいない。しかし神の山、「主の家の山」において、神の民への責めは取り除かれる。聖書の王国に関する約束の一つに、「あの古い蛇、すなわち悪魔、サタン」——民を欺き圧迫する大いなる者——が縛られると記されている（黙示録20:2）。神の約束が示す展望はなんと素晴らしいことか！神の約束ゆえに、私たちの希望はどれほど輝かしいものであろうか。イザヤ書25章9節はこう語る。「その日には、こう言われる。『見よ、これが私たちの神である。私たちは彼を待ち望んだ。彼は私たちを救ってくださる。これが主（エホバ）である。私たちは彼を待ち望んだ。私たちは喜び、彼の救いを喜ぶ』」

確かに人々は待ち望んできた。神の王国が与える祝福を。しかしその祝福の源が何であるか、彼らは知らなかった。人々は新たな状況をユートピアなどと呼んできた。だがこれらの祝福が

注がれる時、最大の祝福の一つは、その源を理解することだろう。彼らは悟るだろう——世界を贖い救うために御子を遣わされた偉大なる愛の神こそが、この壮大な計画の立案者であり設計者であると。この計画は全世界に永続的な平和をもたらし、健康と永遠の命、そして神自身と御子についての知識をもたらす。この知識そのものが祝福であり、人類の歴史を通じてごく少数の者しか享受してこなかったものである。

## 新約聖書による確認

旧約聖書に記された神の約束を主に引用してきたが、これらの尊い約束はすべて、新約聖書において神の僕たちを通して神によって確認されている。例えばイエスについて、神の国を宣べ伝えたと記されている。それだけでなく、病人の癒やしや死者の復活といった

奇跡を行って、その口で語ったメッセージを各地で裏付けたのである。使徒ペテロは使徒行伝3章20-

24節で、キリストの再臨による再臨について語り、その時世界は「万物の回復の時」を期待できると述べています。

神は世界の初めから、聖なる預言者たちの口を通してこの回復の時を予告されてきました。ペテロがここで言及した回復は、彼が生まれつき足の不自由な人を癒した直前の奇跡によって示されました。（使徒言行録3:1-

8）。また、使徒言行録第4章2節で指摘されているように、死者の復活への希望も含みません。使徒パウロはローマ政府の前で証言した際、イスラエルの預言者や長老たちの希望は、義人も不義人も共に復活することにあると述べました。使徒言行録24:14,15

## パウロの復活の教え

コリント人への第一の手紙15章に記されたパウロの卓越した死者の復活に関する教えにおいて、彼はこう述べている。「しかし今や、キリストは死者の中からよみがえり、眠っ

た者たちの初穂となられた。なぜなら、死が人を通して来たように、死者の復活もまた人を通して来たからである。アダムにおいてすべての人が死ぬように、キリストにおいてすべての人が生かされるのである。ただ、それぞれ自分の順序がある。初穂はキリスト。次に、キリストの来臨の時（ギリシャ語 臨在）にキリストに属する者たちである。」この記述において

パウロは神の国の祝福について語っている。なぜなら彼は続けてこう述べているからだ。「それから終わりが来る。すなわち、キリストが御国を父なる神に渡し、すべての支配、権威、力を打ち倒すときである。キリストは、すべての敵を御足の下に置かれるまで、必ず支配なさる。最後に滅ぼされる敵は死である。」コリント人への第一の手紙15:20-26

死そのものがついに滅ぼされるという考えは、なんと包括的なことか！もちろん、これは死の中で眠っていた者たちが目覚め、残り的人类と共に王国の祝福を分かち合うことを意味する。そして、なぜそうあってはならないというのか？生きている人類の世代が、今

日私たちを取り巻くあらゆる狂気の表れから解放され、病気の病魔や死の災いからも自由な完璧な世界を享受しているのに、過去に生きた何十億もの人々が、あまりにも早く死んだためにこれらの祝福を逃していることを知ったら、どれほど不満足なことだろう！

しかし神の御業はそうではない！狂った世界に対する神の救済は、すべてを包括するものである。

ある意味で、世界は人類が初めて神の律法に背いて以来、均衡を失ってきた。人類の各世代は、社会生活と家庭生活の両方で不調和を経験してきた。すべての人々が苦痛と死を味わい、愛する者を死が奪うたびに悲しみに満ち、涙で目を潤してきた。これら数十億もの人々が今、神の愛に満ちた王国の恵みの境界の外にいると考えるのは不合理である。

苦しむ者や死にゆく者の間には「命ある限り希望あり」というよく知られた言葉がある。しかし神の力をこの言葉に限定することはできない。神の約束は、死を超えた希望があること、すなわち死者が復活する時が来ると

保証している。聖書がすでに述べたように、それは「死者の復活」と記されている。イエスは言われた。「このことを不思議に思うな。墓にいる者たちがみな、その声を聞いて出て来る時が来るからである。」（ヨハネ5:28, 29）善を行った者たち（すなわち、この世で信じた者たち）は、いのちの復活へと出て来て、キリストと共にその栄光の王国で生き、支配する。この王国は、全人類への祝福のな経路となる。残りの者たちは裁きのために出て来る。すなわち、彼らは出て来て試練に置かれ、あの新しい世界の恵まれた環境のもとで神への忠誠を証明する機会を与えられるのである。これ以上の何を求めることができようか！

旧約聖書では、死者の復活は様々な形で示されている。復活という言葉自体は旧約聖書には使われていないが、神の靈感を受けた御言葉のその部分では、死にある者たちを囚人に、死からの目覚めを捕囚からの解放に例えている。神の助けによる捕囚からの脱出を約束するこれらの言葉は、人類全体を包括するほど包括的である。彼らが死から連れ出され

ることは、帰還として描かれている。モーセは祈った。「主よ、あなたはすべての世代にわたって私たちの住まいとなられました。山々が生まれる前から、あなたが地と世界を造られる前から。永遠から永遠まで、あなたは神です。あなたは人を塵に帰らせ、『人の子らよ、帰れ』と言われます。」詩篇90:1-3

エデンの園において、神は最初の両親を裁き（  
）、園から追い出し、未完成の大地で死ぬように定められた時、人類は滅びへと向かわせられた。その時こそ、人類の苦難が真に始まったのである。しかしモーセは、これが神の人類への御業の終わりではないと保証する。神が塵へと変えられた者たちは、驚くべき命令を聞くであろう。「人の子らよ、帰れ」と。そう、御自身の死によって世界の贖いと救いの備えをなされたキリストは、神の力によって、死んだ人類のすべてを生きている者の地へと呼び戻されるのだ。

イザヤ書35章10節には、死からの人類の帰還に関するもう一つの驚くべき約束が記され

ている。「主の贖われた者たち〔カルバリの十字架におけるイエスの死によって贖われた者たち〕は、歌と永遠の喜びを頭に載せてシオンに帰って来る。彼らは喜びと楽しみを得る。悲しみと嘆きは逃げて行く。」この章全体を通して苦しむ世界に示された明るい希望に、なんとふさわしいクライマックスであろうか！第三節からこう記されている。「弱った手を強めよ、震える膝を堅くせよ。恐れる心に言え、強くあれ、恐れるな。あなたの神が来られる。

の復讐をもって来られる。神の報いをもって救いに来られる。」イザヤ書35:3,4

この約束は今日にこそふさわしい。罪に呪われ死に向かっている人類に対する神の復讐の日である。しかし神は単に世界に復讐を加えるためだけに来られるのではない。この約束が示すように、その復讐は報いの形をとっている。神の真の目的は人類を救い祝福することにある。「あなたがたを救うために来られる」のだ。



イザヤは続ける。「その時、盲人の目が開かれ、耳の聞こえない者の耳が開かれる。その時、足の不自由な者は鹿のように跳びはね、口のきけない者の舌は歌う。荒野に水が湧き、砂漠に川が流れるからだ。乾ききった地は池となり、渴いた地は泉となる。竜が巣くっていた所、その住みかには、葦や葦草が生える。」(5-

7節)。これは、今日これほど苦しみと恐れに満ちた世界の展望に、なんと大きな変化をもたらすことか！第8節にはこう記されている。「そこには道があり、道筋があり、聖なる道と呼ばれる。汚れた者はそこを通り過ぎず、ただ旅人、たとえ愚か者であっても、そこでは迷わない。そこには道があり、道筋があり、聖なる道と呼ばれる。汚れた者はそこを通り過ぎず、ただ旅人、たとえ愚か者であっても、そこでは迷わない。そこには獅子はいない。猛獣もない。そこには見出されない。しかし贖われた者たちはそこを歩む。」

(イザヤ書35:8,9) 続く10節には、主の贖われた者たちが死から戻り、永遠の喜びの歌を頭に載せて帰還するという、祝福の頂点における驚くべき約束が記されている。預言者が

「そこには獅子はいない」と言うとき、黙示録20章の約束を想起させる。そこでは、その時にサタンが縛られると告げられている。聖書はサタンを、むさぼる獅子のように、食い尽くそうとする者を捜し求める者と描写している。ペテロの手紙一5:8

神が義の敵を滅ぼし、すべての肉なる者に御霊を注がれた後の、あの新しい世界における状況は、なんと素晴らしいことでしょう！イザヤはこう記している。「そのとき、裁きは荒野に宿り、正義は肥沃な地に留まる。正義の業は平和となり、正義の効果は永遠の静けさと確かな保証となる。わが民〔全世界の人類〕は安らかな住まい、確かな住処、静かな憩いの地に宿るであろう。」イザヤ書32:16-18

その時こそ、神の王国が地上に支配し、狂った世界に対する神の救済策が完全に機能する時です。なんと素晴らしい展望が私たちの前に広がっていることでしょう！人間の未来への希望が神の約束と同じく輝いていると悟ることは、なんと素晴らしいことでしょう！

## 最終的な証言

神の国の最終的な証しは、黙示録の書を通して私たちにもたらされます。この書全体を通して王国に関する多くの言及がありますが、ここでは特に20章、21章、22章に見られるいくつかの確約に簡潔に注目したいと思います。20章では、すでに指摘したように、サタンが縛られるという確約が与えられています。キリストが、その忠実な従者である教会と共に、千年の間生き、支配し、神の約束された祝福を授けることが保証されている。またこの章では、死と地獄が、それらの中にある（罪の奴隷）である死者たちを吐き出し、死と地獄の両方が滅ぼされることも告げられている。

第21章ではこう告げられている。「神は彼らの目からすべての涙をぬぐい去られる。もはや死もなく、悲しみも、叫び声もなく、痛みもない。以前のものは過ぎ去ったからである。御座に座っておられる方が言われた。『見よ、わたしはすべてのものを新しくする。』また私に言われた。『書き記せ。これらの

言葉は真実で確かなものである。』」（4-5節）。聖書の最終章にはこう記されている。「また、神と小羊の御座から、水晶のように澄んだ命の水の清き川が流れ出ているのを見た。その川は都の大通りの真ん中を流れ、川の両岸には命の木が植えられている。それは十二種類の果実を結び、月ごとに実を結び、その葉は諸国の民を癒すためである」（黙示録22:1-

2)。（黙示録22:1,2）。黙示録22章17節にはこう記されている。「御霊と花嫁は言う。『来なさい。』聞く者は『来なさい』と言うがよい。渇く者は、だれでも来て、いのちの水を無料で受けなさい。」

神の御言葉から、狂った世界の病に対する救済を神が確かに備えてくださったという、これ以上の保証を求めることができるだろうか。そう、諸国民は癒しを必要としており、この預言において神が諸国民の癒しの手段を備えられたと告げられている。それゆえ、恐れを捨てて頭を上げ、この王国の近い到来を待ち望もう。なぜなら、神の王国が目前に迫っていることを信じるに足るあらゆる理由が

あるからだ。その一つこそ、今まさに世界を覆う狂気そのものである。